

西洋古典資料保存講習会に参加して

夏井 友子（資料管理課）

本講習会は一橋大学社会科学古典資料センターによって行われ、今年で第9回を数える。

保存とは「そのままの状態を保つこと」であるが、古典資料の保存は字義通り、現状をできるかぎり維持することを目的とする。

資料の敵はまず、虫、カビであり、保存対策は環境の保全が筆頭である。今日では薬剤を使用した根絶よりも、予防的な措置が注目されている。

書庫内の温湿度の管理のためにはデータロガーを設置し、環境が防カビに適した範囲におさまっているか、外部環境にどの程度影響を受けるものか、常時計測してデータを蓄積しておくことが望ましい。でないと非常事態が起こってもそれと気がつくことができない。資料にとって理想的な環境は温湿度がなるべく均一に保たれることであり、空調があっても、開口部等からの外気の影響が大きければ温湿度は変化する。ヨーロッパの古い図書館などには、分厚い石造りであるために、空調などなくとも内部の温湿度が保たれている例がある。日本ではそうはいかないが、正倉院に見られるように、空気の流れを保存環境の周囲に設けることで環境の変動を抑えることができる。建物としては外壁に接した部分に廊下や事務所を設け、内側に書庫があると、書庫の環境はより守られる。当館でいうとエレベータ・ホールのあたりがよろしく思われ、惜しいような気がするが、貴重書庫は外壁の中に入れ子の形で作られており、目的にかなっている。外壁に接していて利用者の出入がある古書資料庫と、どの程度温湿度の変動に差があるものか数値で測ってみたいものである。

非常事態、すなわち雨漏り、水害、火災等によって資料が被害を受けた場合には、即時に資料を密封・凍結するのがよい。状況の進行を止め、専門家の指示を仰いで対策を講じる時間を捻り出せる。水害などで資料がぬれた場合、乾かそうとすると紙が傷んだり、カビが発生したりする。ぬれたまま冷凍したほうが現状を維持できる。非常時に使える冷凍庫の確保、ドライアイスの入手経路

の確保を推奨された。理工系研究施設で使用する低温装置は、精密さを要求されるため特異な目的の使用は断られるし、食品系の冷凍庫も、保健衛生の観点から洗いや顔をされるということである。

虫については、書架・資料を視認によってチェックする。例えば資料を書庫に入れる前に前室に置き、汚染の有無を確認することは有効である。書庫環境がよければ持ち込まないことが肝要になる。冷凍という手段は防虫には効果的で、たとえ小さな釣用冷凍庫であっても、時間をかけて冷やし切れば十分な効果が得られるそうである。

すでに破損のある資料についても現状維持が目標であり、現物に手を入れることは極力行わない。古典資料の補修は可逆的な方法が原則である。センターでは表具の技術を応用し、洋書についても和紙と生麩糊を使った補修方法を編み出している。一例として、Micro-dot-adheringという手法は、微細な点状に糊付けすることでページを傷めずに補修用和紙を接着する方法であるが、市販のマジックテープとゴム板を使って、素人でも脅威（資料に対する脅威である）にならない補修ができるように工夫してある。現物のサイズや状態にぴたりと合わせた保存箱やバインダーも、在架時に破損が進行することを防ぐ。資料のマイクロ化、デジタル化により現物を使わずに利用目的を果たせるようにすることも、間接的に資料を保護する。

センターの知識・技術は実践から生まれたものであり、一点一点の現物と向き合って工夫を重ねてきている。図書資料の修復技術を持つ専門家が全国的に少ないという状況もあり、外注に依存するよりも経費・事業計画の面で利点があるという。講習会を開けるほどの経験を蓄積しているのもその成果であり、同時に資料・環境に対し、館員の理解は深まる。貴重書保存修復工房をもつ図書館は稀少であるが、長期的に見てその意義は小さくないと、恩恵に与って思うところである。